

会員館の最近の話題から

古書の売り払い事業を振り返って

愛知教育大学情報図書課課長補佐 稲垣敏之

本学図書館では現在いろいろと懸案事項を抱えているが、大きな問題として図書の収納スペースの狭隘化が挙げられる。この対策の一つとして不用となった図書の廃棄等の処分がある。

昨年主に重複図書約18,000冊について、本学の規程に沿った諸手続きを経て廃棄等の処分を行った。

法人化前は規則の制約もあり、学内外に利用照会の後、利用希望の無いものは古紙として処分費を払って古紙回収業者が引き取るか、または焼却処分されていた状況である。

法人化後は、処分の考え方も弾力的になり、それぞれの機関の方針で行えるようになり、不用となった図書（古書）の売り払いを行っていくこととなった。

売り払いについては、7月から取りかかったが、最初は古書店への問い合わせから行った。しかし20件ほど問い合わせたところ、図書館所蔵の図書は備品番号、請求記号ラベル、図書カードホルダー、大学名など押印や貼付がされており、ほとんどの古書店から美品でないものは商品価値が無いため買い取りを断られてしまった。この過程で当初は売り払いを諦めかけたところであるが、唯一ある古書店が約2,000点の古書を小額ながら購入してくれることとなった。

次に7月から8月にかけて本学教職員を対象に売り払いを行い、40名弱から購入希望があり、ここで約2,000点の古書が購入されることとなった。

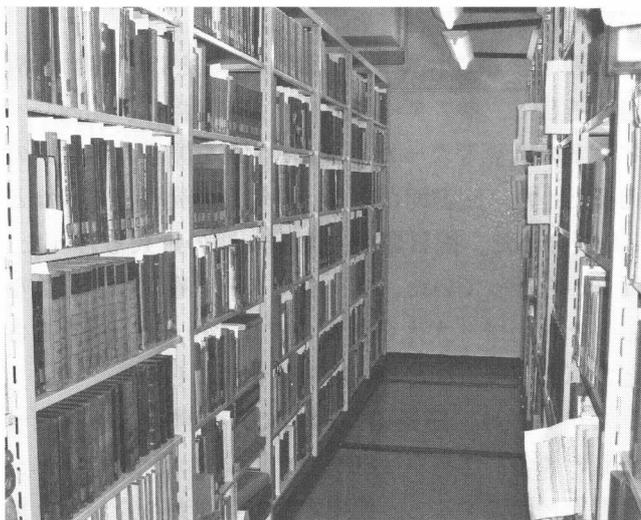
7月30日、31日の大学説明会の折りにも約150点の高校生向きの古書を選び出し売り払いを試みたが、結果は1冊も購入希望者は無かった。

その後、残った約14,000点について11月15日から11月30日にかけて本学学生、一般市民を対象に本学図書館ホームページ等での広報により公募した。公募当初は1日あたり十数件ほどの申し込みであったが、その後新聞報道が行われたことをきっかけに十倍から二十倍の申し込み、及び問い合わせが殺到し、その対応に苦慮する日々が続いた。その結果、最終的には

1,400件弱の申し込みがあった。

この数字は、本学図書館で考えていた予想の十倍以上の件数で思わぬ反響に我々は非常に驚き、併せてこれからの対応において、種々の電話での問い合わせ、申し込み者の1冊1冊のデータ処理、処理にあたっての問題点の整理など業務が多忙となり、一層大変な事態となることが予想され、戸惑いと不安を感じていた。

その後の対応は、約1,400件弱の申し込み者の1冊1冊のデータ処理、申込者個別の古書リスト作成、古書抜き出し、申込者個別の住所録作成、結果通知、古書引渡し、現金受領などの作業を必要とし、余りに処理が多量なため、アルバイトを雇い処理を行った。また併せて昨年度は図書館システムの移行準備、機関リポジトリの構築など新規業務が重複していたため、職員の残業も非常に増加し、古書の処理作業は本年度まで引き摺ることとなった。



最終的な事業結果は、売約冊数が約13,000冊弱で全体の約70%の古書が売却された。

今回の古書売り払いについて費用対効果を考えると決して効率のよい事業とは思えなかった。しかし、当初紹介したとおり各古書店の反応や、学内教職員への売り払いの際の反応から考えれば、一般市民から見るとほとんど専門書である当該古書など、ましてや美品でないものに対し、とても希望者があるとは思えなかった。これほどの希望者が殺到するとは誰も予想していなかった。

振り返って考えてみると、一般市民が図書に対しこんなにも熱い思いを持っていることを改めて感じ、またこの多量の古書がリサイクルされることは、環境の面においても価値のあることであるということも併せて感じ、今回の古書の売り払いが微力ではあるが世の中の役に立っているのではないかという思いを感じる次第である。

最後に本学図書館スタッフ一同、今後ともより一層サービスの向上に努めて参りたいと思っております。これからも本学図書館をご支援賜りますようよろしくお願いいたします。